第36回 安田女子大学・安田女子短期大学 エッセイコンクール

自由部門

学長賞「パプリカ」

薬学部 薬学科 3年2組 水越 朱音

いつの間にか、笑うことが苦手になっていたらしい。

カメラを向けられても、どんな顔をしたらいいのか分からない。とりあえず笑顔を作ってみるけれど、写真に写る私は苦手なパプリカを食べた時みたいに変な顔をしている。

いや、きっとこれは、生えかけの親知らずのせいだ。だってあいつ、すごく痛かったもん。

スマホのカメラロールに保存された写真を整理しながら、借りているアパートの部屋の窓の外を見れば、太陽の光をいっぱいに浴びながら咲くヒマワリが、とても眩しかった。実家の玄関先のプランターで、毎年ミニヒマワリを育てていた幼い私は、もういない。もうすぐ夏休みだった。

深夜の高速道路を走っていると、いつも思うことがある。これから行く先に、私の居場所はまだあるのか、と。楽しみにしていたはずの帰省の始まりの夜は、雲が星を隠していて、向かう方角が分からなかった。

一年ぶりに会う家族は、私が知っている彼らのようでありながら、そうではなかった。

白髪がまた増えていた。救急車で運ばれていたことが私にだけ秘密にされていた。見上げていたはずの目は曲がった背中でのせいで見上げてくるようになっていた。毎朝ギリギリまで寝ていた子が早起きして自分と親のお弁当を作っていた。みんな、それぞれが変わっていた。

それなのに私は、幼いころと同じ茶碗でご飯を食べていて、勉強机の引き出しを開ければひらがなで記名された2Bの鉛筆が出てくる。洗濯機と電子レンジは、壊れて新しく買い替えられていて、使い方が分からない。

ふと、竜宮城から帰った浦島太郎はどんな気持ちだっただろう、いっそのことネバーランドにでも永住できたら、なんて虚しい空想をしてみる。

親知らずのせいで傷ついた歯茎が、じりじりと痛い。そろそろ抜こうか。

そういえば、乳歯がなかなか抜けなくて、気が付けば、その後ろに大人の歯が生え始めていた、なんてことが以前にあった。いい加減抜かなければ、と歯医者さんに行った。

涼しくなってきた夕方に、乾いた洗濯物をたたんでいると、突然、なぜいつもそんな怖い顔をしているのか、と聞かれた。だからそれは、親知らずのせい—と思ったけれど、常に痛いわけではなかった。

パプリカを食べた時の顔をした、あの写真を思い出す。たまたま引き出しの中を漁っていて見つけた、幼いころの私の写真と比べてみる。幼い私は、なんて純粹できらきらとした顔で笑っているのだろう。ヒマワリみたいに眩しい。

このころはまだ、パプリカも苦手ではなかった。美味しく、食べやすく、料理されたものを食べているだけだったから。

でも、幼い私はもういない。

この夏休みが終われば、また料理も掃除も洗濯も全部自分でやらなければならない。お酒は飲めないけれど飲むこと自体は許されている。クレジットカードも作れるだろう。奨学金とアルバイト代で学費と生活費もギリギリ賄えている。一人で小旅行したこともある。親知らずだって、既に一本抜いた。

そうやって、私も変わってしまった。

変化というお別れを繰り返して、幼い私はもういない。

実家を出てひとり暮らしを始めたこと。成人したこと。自分の力でお金を稼ぐようになったこと。これらはきっと、これからあるたくさんのお別れの中のほんのいくつかだ

産声をあげた瞬間も、一人で歩けるようになった時も、名前を漢字で書けるようになったことも、歯が抜けたことも、学校の卒業も、親しい誰かの死の経験も、みんな何かとの別れだったのだから。

お別れはいつだって、パレットの上でつくったお気に入りの色が、洗い流されてしまうみたいに、不可逆的で永遠に何かを失ってしまう。それは、嬉しかったり、悲しかったり、寂しかったり、哀しかったりして、パプリカの甘くて苦くて独特で複雑な味のよう。

乳歯はとっくに抜けて大人の歯に生え変わった。

オトナの私は、好き嫌いなんてできないから、パプリカだって食べなくちゃいけない。

これからも、私はお別れを繰り返していく。

日差しが和らいで、部屋の中がうっすらと橙色に染まる。網戸を通る涼しい風が、草刈りをしていた近くの畑から、青くみずみずしい匂いを運んでくる。黄色く日焼けした畳の上で、私は洗濯物をたたむ。そばでは家族が、風にあたりながら寝転がっていたり、静かに雑誌を読んでいたりと、スマホで今夜の夕飯のレシピを探している。

こんな穏やかな時間を、私はあと何回彼らと過ごせるのだろうか。

愛しくて、切なくて、あたたかい、夕焼けみたいな一コマ。

パレットを洗う前に、お気に入りの色を筆にとって、心のキャンバスに染み込ませる。

そうすれば、変わっていく何かも、消えてしまうわけではないと思えるから。

気が付けば、ほんの少しだけ、口元を緩めて、目を細めていた。

今の私は、きっと笑っている。

だから、大丈夫。

写真用の笑顔は、気が向いたら練習しておこう。

後日、歯医者さんに行くと、親知らずはまだ抜けなかった。もう少し生えてこないといけならしい。

なぜか、少しだけほっとした。